

KSKQ

イマージュ

2023年9月

1991年9月3日 第三種郵便物承認

毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行

態変40周年・第77回公演

# 私たちはアフリカからやってきた

作・演出・芸術監督 金満里

音楽 内橋和久



撮影/テンギョー・クラ

狼煙を上げる

生き活きとした

闘いの、帰還へと

10月27日 (金) 19:00

10月28日 (土) 13:30 / 18:30

10月29日 (日) 13:30

チケット絶賛発売中!

会場 ABCホール (大阪市福島区)

## 内橋和久 音楽家

# 私たちはアフリカからやってきた！

金満里

態変が胎動し出してから今年40年を迎えられました。ここまで来れたのも、支えていただけの皆さんあってのことと、深く感謝致します。この40年を記念する作品に、私は、アフリカを選び、皆さんへお届けしたいと思います。

態変とアフリカは、存在自体で勝負できる、生粋の生命の輝きだ、と思います。既に31年前、態変は初の海外公演の地としてアフリカのケニヤからお呼びが掛かかり、ナイロビ・キスム・カカメガの3都市を巡る21日間に渡るケニヤ公演ツアーを果たしました。人類の発祥の地アフリカへ私が抱く憧れは、人類に魂が宿る発端を探ろうと足掻くプロセスが、きっとそこにはあるという直感です。

現代の人間像を世界に求め目を転じると、今にも世界第三次戦争を起こそうと金の亡者が巣くつて、散々無辜の民の命を恣に弄ぶ悍ましい様相が！ そんなものを人類が望んでいるのか？！と問いたくなる、酷い現実があります。

そういった人類としての人間の今を、悪魔に売り渡し陥れて済むのか、という問いを私は、人類発祥の地アフリカと共に探りたいと思うのです。アフリカが、その後の歴史においてずっと白人優生思想の最底辺に置かれ苦難な道を生きながらも、その根源的生命の輝きを失わないということの理由として、人間のエゴがヒントではないかと思えます。それは、自己保存の道具としてのエゴだけでない、打つかり合い・活かし合いがあつていいのだという、エゴの肯定があるのです。

そこに、どつかりと腰を据え、善悪併せ持った人間の本性で向き合える、人の顔をした、何処でもない此処の場から来ること。

そんな、命の叫び、を、この40年目の態変舞台で、大きく狼煙を上げたいと思います。是非、アフリカからの帰還を果たす大いなる旅に、あなたも身を乗り出し、ワクワクとした出発をご一緒致しましょう。

はじめて旧名の「劇団態変」を知ったときから、このチャージングで能動的な命名とその活動に魅了されてきました。演者一人ひとりの特性を武器にして、常に戦う表現を続けてこられた。この事実刺激を受け、鼓舞され、挑発されてきた者のひとりです。音楽監督として三十数年活動を共にした劇団維新派の松本雄吉は「態変」の金満里さんと古くから懇意で、彼からよく話を聞いていました。

金さんからは何度か作曲の依頼を受けていたもののなかなかタイミングが合わず、今回やっとの実現です。「態変」に音楽ができること、すべきこととは何だろうと自問しながら、パフォーマンスと一体化する、より美しい、より力強い表現を自分なりに目指して創作しています。



<innocentrecord.com>

大阪府生まれ、ベルリン在住。

ギタリスト、ダクソフォン奏者、コンポーザー、アレンジャー、プロデューサー。レーベル「イノセントレコード」主宰。インプロヴィゼーショントリオ/アルタードステイツ主宰。83年頃から即興を中心とした音楽に取り組み始め、国内外の様々な音楽家と共演。活動の領域は音楽だけにとどまらず、映像作品や演劇などの音楽も手掛け、中でも、劇団・維新派の舞台音楽監督を主宰、松本雄吉が亡くなるまで30年以上にわたり務めている。維新派以外にも宮本亜門、河原雅彦などの作品も手がけ、近年はチェルフィッチュの岡田利規のミュンヘン、カマーシュピールでの4作品と2021年神奈川芸術劇場、2022年ハンブルグのタリアシアター、オスロ国立劇場での作品の作曲を手がける。音楽家同士の交流、切磋琢磨を促す「場」を積極的に作り出し、95年から即興ワークショップ「ニュー・ミュージック・アクション」を神戸で開始する。その発展形の音楽祭、フェスティバル・ビヨンド・イノセンスを96年より毎年開催2007年まで続ける。これらの活動と併行して歌に積極的に取り組み、おおたか静流、UA、細野晴臣、くるり、七尾旅人、青葉市子とも活動。Salyuとはデュオユニット「ウッタギッタ」を2014年に結成。即興音楽家とポップミュージシャンの交流の必要性を説く。また、2002年から2007年までNPO ビヨンド・イノセンスを立ち上げ、大阪フェスティバル・ゲート内でオルタナティヴ・スペース、BRIDGEを運営したことも知られる。現在はベルリン、東京を拠点に活躍。



ブログ 金満里の庭 更新中  
<https://kimmanri.exblog.jp/>

## 『私たちはアフリカからやってきた』パフォーマーインタビュー!!

## 下村雅哉

## ◆ 人類の旅について

旅のシーンを作っている時は、ジャングルをイメージしたりする。何も無いところを行っている。最初はただの個人で、だんだんと人が集まってくる。ゆっくり転がっている中で、100年、200年、が簡単にとんでいくような、どんどん時間が経っていく感覚。

## ◆ 「奴隷船」の印象

絶対的な、支配するものとされるものがある。黒い船のイメージ。海の中で、船がひとりぼっちに流されているようなイメージをもった。今、いろんなところから人間がいなくなっていく感じがある。機械化で、自分が普段使っている駅からも人（駅員）がいなくなる。機械に首根っこを掴まれているような感覚は、奴隷と同じなんじゃないだろうか。

## 井尻和美

## ◆ 今回の作品について

台本を初めて自宅で読んだ時、アフリカに行きたくなった！

人類の最初の旅を演じるシーンの稽古で動いていると、地面からエネルギーを感じて、実際にアフリカの大地、サハラ砂漠を転がりたいような気分になる。仲間を増やしながら進んでいる感じがして、アフリカが人間の原点ということが想像出来る。

## ◆ 公演プレ企画／「ナミビアエクスペリエンス」のこと

本番では、ナミビアのダンス映像がスクリーンに映される中で動いた。本番中はスクリーンは見なかったが、スクリーンがある自分の背後から押されるようなエネルギーを感じた。自分の奥にもともとあったエネルギーが後ろから押されることで爆発した！ナミビアからもらったエネルギーは今も自分の中にある。

## 渡辺綾乃

## ◆ 公演プレ企画／「ケニアDAYS ケニア篇」のこと

ケニア映像を見て思った事は、しぼり、がないのだということ。公園でのパフォーマンスは、許可はとったりするのかもしれないけど、あとは好きにしたいよ、という自由があったみたい。お互いが混じっている感じで、ぜんぜん違う雰囲気。菊本さん（※ケニア篇二日目の講師）のお話を聞いていると、日本の暮らしと全然違った。父親がいなくてか母親がいなくてか、日本でもあるけれど、そういう生き方があって、それが普通なのかもしれないなと思ったり。

## ◆ 今回の作品について

難しい：自分は外国にももちろんアフリカにも行ったことはないし、イメージがつかない。自分の家がつぶされることを想像して、と演出から言われたけれど、そんな環境になったことがないから本当に迷う。家がなくなった時、自分が真っ先にする行動ってなんだろう・・・あと、「仕事ができない」という役割を演じるのは難しい。いつもの私は「仕事ができる」ようにがんばっているから、「できない」ことを身体表現だけで表すということは、とても相反すること。なんとか役を捕まえようとしています。

## 池田勇人

## ◆ 人類が続けてきた旅 について

人類は旅を続けていく中で、強くなっていく半面、しんどくなっている。醜い質とか、悔しさを育てられていくような。今回、旅を演じていく中で、どんどん自分の醜さが出てくるのをショックを受けながらもどんどん出していている。観客の人には、「お勉強」ではなくて、そういうショックをいかに伝えられるか、というのが大事なことかなと思う。

## ◆ 態度のケニア公演ツアーの映像について

態度が、世界に認められているのが嬉しかった。日本のお客さんよりも、距離が近いような感じで、対等に障害者を見ているような反応と思った。でも、自分は、ケニアまで行く勇気がない、と思った！昔のパフォーマーと、熱さが違うというか、そんな根性が自分にはないということ突き付けられたみたい。それくらい、生々しさを感じた。

## 小泉ゆうすけ

## ◆ ターナーの、「奴隷船」の絵を、最初にみた時の印象

すごい大シケの後で、大波が立っている手前で何人かの手が波間に見える絵…：恐ろしい絵だなと思った。奴隷船は知らない人間を、海に放っている。捨てられた人間と、船の中で生きていい人間、その間にはものすごい隔絶感がある。この隔絶間で思い出すのは、子どもの頃、京都の大きな訓練施設に入院させられた時のこと。夜に、玄関口の外には人が歩いていて人がどんどん行き来しているのに、ガラス戸一枚隔てたドアの中は誰も動いていなくて、薄暗くシーンとしていた。その、遠い、手が届かない感じに似ているように思った。

## ◆ 人類の起源について

今日は西成から来た。生まれた時は母親の胎からやってきた。遺伝子レベルでは、と考えると、アフリカあたりからかな、と素直に納得している自分がいる。アフリカの踊りも、絵画も、ごちゃごちゃしていない、シンブルな力強さがあると感じていて、そこにしかルーツはないよな、と。30年前ケニアに実際行ったという経験にはやはり大きく影響を受けていると思う。

## 山崎ゆき

## ◆ 「奴隷船」の絵の印象

絵を見た時に、貨物船みたいと思った。奴隷として、じっとして船に乗っている。怖いからじっとしている。どこに連れていかれるのかわからない、不安でいっぱい。いつ捨てられるかわからない、そんな不安を、まだまだ（稽古で）出せていないな。

## ◆ 人類のはじめの旅について

そのシーンを演じている時、感情を表に出さない人間というか、感情のない「何か」を演じている感じがあります。他の人との距離もわからなくなる。景色のイメージは、最初はアフリカで、いろんなところに出発していくようなワクワクするイメージ。

## キーワード

## ターナーの「奴隷船」



霧と蒸気の絵で有名な印象派画家J・M・W・ターナーに「奴隷船」と題した作品がある。それは1781年の「ゾング号事件」を題材としたものだ。アフリカから西インド諸島へ奴隷を運んでいたゾング号が132名ものアフリカ人奴隷を海に「捨て」て死亡させた。嵐のせいで飲料水不足になったが、「貨物」の奴隷の餓死は運送者の責任、水死ならば海難事故の保険金が貰える、そのへんのことだったらしい。この事件が殺人としてではなく保険金詐欺として裁かれたというのが、一層の闇の深さだ。これは英国での奴隷制廃止運動の追い風になった。でも、誰を海に捨て誰を残すか、どうやって決めたんだろう。選別された側の心はどうだったんだろう。そういうことを考えてしまう。

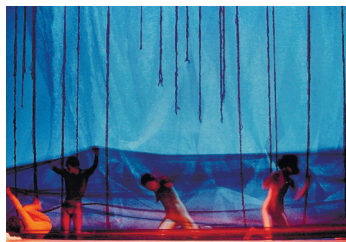
## 人類の最初の旅（グレートジャーニー）

ヒトとサルとの共通の祖先から「原人」が誕生した場所がアフリカでした。色々な原人が登場し進化と絶滅を重ね、その唯一の生き残りが、我々ホモ・サピエンスです。その登場は約30万年前で、東アフリカが根拠地。何の事情だったのか、彼らのある部分が故郷をあとに長い移動を開始したのが約7万年前のこと。

この移動が最初に成功したルートは、紅海を越えてアラビアからインドへ、島伝いにオーストラリアへ。その後インドから二手に分かれアジアとヨーロッパに4万5千年前に拠点ができ、2万5千年前にベーリング海峡を渡りアメリカ大陸へ。南米の南端には1万4千年前に到達しました。

このように、私たちはアフリカからやってきたのです。

態変 10年20年30年  
舞台写真クロニクル



『Heavenly Forest (天国の森)』1992年  
photo by 未来



『碧天彷徨』2003年  
photo by 青木司



『Over the Rainbow -虹の彼方に』2013年  
photo 中山和弘

# 態変 賛助会員制度 (2023年度) ご協力をお願い

8月に発行しました40周年記念公演DM第一弾 賛助会員募集には、多くの方にお応えいただき、誠にありがとうございました。

40周年というハレの年を迎え、記念企画として行いました態変アーカイブ公演上映会やアフリカ days 1・2は、好評を得て、沢山の皆さまに楽しんでいただくことができました。この勢いを10月公演『私たちはアフリカからやってきた』に繋げていきたいと考えております。

このように、態変の活動としては、コロナ以前の勢いを取り戻してきている状態ですが、事務所運営の実態としては、まだまだ青息吐息の状態が続いております。

態変は、今後も常に生命の価値を問い、先鋭的な芸術を創造していく所存です。

賛助会員へのご応募、何卒よろしくお願いいたします。

## 年会費

個人会員(年会費) ..... 一口 5,000円  
法人会員(年会費) ..... 一口 20,000円

## 入会方法

### 郵便振替

同封の振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。  
口座番号 00920-8-320343 加入者名 イマージュ・劇団態変

### PayPal

メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方はホームページよりご利用いただけます。劇団態変HP → 日本語TOP → 「賛助会員制度」にお入りください。

## 会員特典

- ・会員証発行
- ・劇団態変公演ダイジェスト映像DVD進呈 (年1回)
- ・態変公演チケット500円引き

# 情報誌イマージュ vol.86 2023年夏号

クロスオーバー談義●西成彦×金満里

「死者たちの夏 7.26-9.1 サバイバーとしての我々」

文学者で、昨年末に『死者は生者のなかに——ホロコーストの考古学』を上梓された西成彦さんと金満里が、金満里ソロ「寿ぎの宇宙」、7.26 相模原施設障害者虐殺、9.1 関東大震災、死を悼む夏について、語り合う。

## 特集● 「誰の命も踏みつけさせぬ」

イマージュ編集部、渾身の特集「誰の命も踏みつけさせぬ」では、入管、奴隷制、トランスジェンダーなど命にかかわる問題を多方面から取り上げています。

特集以外にも、充実した劇評や連載が紙面を飾る。7月末に好評を博した態変イベント「ナミビアエクスペリエンス」のナミビア側コーディネーター、そして『私たちはアフリカからやってきた』の初回公演のアフタートークゲストである、テンギョー・クラさんの手記「アフリカと態変とナミビアとオレとママドリス」も魅力たっぷり！



1冊：500円 /年間購読 1500円 (年3回・送料込) バックナンバー3冊 1000円

<購入方法> 同封の郵便振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。単品でのお申込みは希望の号数を記入ください。

口座番号 00920-8-320343 加入者名 イマージュ・劇団態変

# アフタートーク ゲスト紹介！！

公演終了後、金満里がゲストを迎え、作品について生の意見を交わし合います。  
ご希望の回はどうぞお早めにご予約ください♪

## 10/27 (金) 19:00 テンギョー・クラ (ヴァガボンド、ストーリーテラー)

2001年より世界の様々な地域でヴァガボンド(よそ者)として生きる。モンゴルの大学で英語教師、スリランカのロースクールで語学教師、ノルウェーの大学で現代日本文化講師、ラトビアの高校で日本語教師を務めるなどした後、ストーリーテラーとしての活動を開始。アジア、ヨーロッパ、南米、アフリカでの滞在制作、東京都の文化事業でプログラムユニシエーターとしても活動。コロナによるパンデミック期間は大阪市のアートNPO ココロームで現場作りの責任者を務めた。2022年11月よりアフリカ各国での活動を再開。マダガスカル、ジンバブエ、ボツワナでソーシャルインクルーシブプロジェクトの導入に取り組み、2023年7月、金満里と共同企画「ナミビアエクスペリエンス」を実現させた。

## 10/28 (土) 18:30 斎藤幸平 (経済思想家)

1987年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科准教授。専門は経済思想、社会思想。近刊は、発売即15万部突破の『ゼロからの『資本論』』(NHK新書)、『ぼくはワーバーで捻挫し、山でシカと闘い、水俣で泣いた』(KADOKAWA)。『人新世の「資本論」』(集英社新書)で「新書大賞2021」を受賞。

## 10/29 (日) 13:30 龍崎飛鳥 (緊縛師)

90年代初頭からSMシーンに携わる。京都で27年を迎えた老舗fetish bar.BARBARAのオーナー。女王様という概念だけでなく女流緊縛師として96年にドイツでのヨーロッパ最大イベント「エロティカ」に出演。2000年には写真集「バーニングマン」炎人の写真撮影。2018年京都のアクアにて現代美術アーティスト、クリスチャン・ヤンコフスキーと「フローティングワールド」コラボレーション展示。

## 態変 40周年記念

# 『私たちはアフリカからやってきた』 Tシャツ 販売します！

毎回大好評の、態変公演Tシャツ

今回は長年態変の衣装・美術に携わり、情報誌イマージュのイラストでもおなじみのメラミキコによる繊細なイラストで、お祝いにふさわしいTシャツを鋭意製作中です。公演当日、物販コーナーにてぜひお求めください！

また、『私たちはアフリカからやってきた』公演プレ企画、態変アフリカ DAYS2 ケニヤ編で講演いただいた、菊本照子さんがケニヤから持ち帰ってこられたケニヤのシングルマザーたちによるフェルトアニマルやアーティストによる作品も販売予定です。お楽しみに！



態変 40周年記念公演

## 『私たちはアフリカからやってきた』

作・演出・芸術監督 = 金満里

音楽 = 内橋和久

## 公演日程

10月27日(金) 19:00 ※1  
10月28日(土) 13:30 / 18:30 ※2  
10月29日(日) 13:30 ※3

※の回は金満里とゲストによるアフタートークを行います。

ゲスト = ※1 テンギョー・クラ (ヴァガボンド、ストーリーテラー)

※2 斎藤幸平 (経済思想家)

※3 龍崎飛鳥 (緊縛師)

会場 ABCホール 大阪市福島区福島1丁目1番30号

※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

★ABCホールの入り口は、ABCの社屋の外階段(またはEV)をあがって2階にあります。

## 詳しいアクセス方法

<https://www.asahi.co.jp/abchall/map/>

## チケット (日時指定・全席自由)

【前売り】 一般 4,000円 障害者/介助者 各 3,500円 22歳以下 2,500円 12歳以下 1,000円  
【当日】 4,500円

## チケット予約/ご購入方法

## 【1】態変事務所

チケットweb予約 <http://www.asahi-net.or.jp/~tj2m-snjy/form/ticket2.html>

電話 06-6320-0344 (留守番電話の時はお名前と電話番号をお残してください)

## 【2】Peatix

<https://taihen40-africa.peatix.com/>

※当日受付で電子チケットまたは印刷したチケットをご提示ください。

※クレジット払いとコンビニ払いが可能。コンビニ払いの場合は手数料が必要です。

## 【3】カンフェティ

手順: ①以下のサイトまたは電話で予約をし → ②セブンイレブンでチケット発券

<http://confetti-web.com/taihen-africa/>

カンフェティチケットセンター (0120-240-540 通話料無料・受付時間平日10時~18時)

※チケット発券の際に別途発券手数料が必要です

編集人(返送先): イマージュ 金満里 小泉ゆうすけ 仙城真 和田佳子

〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路1-15-15

tel/fax 06-6320-0344

e-mail [taihen.japan@gmail.com](mailto:taihen.japan@gmail.com)

定価 50円

発行人: 関西障害者定期刊行物協会/大阪市天王寺区真田山町2-2 東興ビル4F